



おすすすめの一冊

中村好一、佐伯圭吾『公衆衛生マニュアル2022』

「公衆衛生」の概念は人類が共同生活を始めた時から発生しており、

飲料水確保や食品衛生、生活環境衛生、疾病予防対策、環境衛生等々と幅広く、人が生活する上での全般に関わっています。さらにその範囲も、時代の変化に伴い大きく変容してきています。

予防医学活動として行われている健診活動もそうです。健診活動は、過去には寄生虫検査、細菌検査、結核検査等のように、急性や慢性の感染症対策として社会防衛論的な意味合いで行われていました。

近年では各種のがん検診、生活習慣病健診（特定健診）、さらには健康づくりのための生活習慣改善指導や健康教育、保健事業等が積極的に行われ、病気の医学に対して健康人の医学（広く生活科学も含めて）としてからだ、こころ、暮らしの健康を守る医学へ発展してきました。

少子・高齢化社会が進展する中で保健・医療・福祉の連携が強く叫ばれて



公衆衛生マニュアル2022
中村好一、佐伯圭吾 編集
南山堂

久しく、今では医療機関もこのことを主張するようになっていきます。こうして予防医学の分野と連携して成果を上げれば、医療や福祉の負担が減るはず

です。そして今、新型コロナウイルス感染症が世界的な流行となり、話題になっています。さまざまな対策が行われて

いる中で、保健所のあり方やパンデミックに対する課題が提議され、医療経済学的な視点からも対策が求められています。

本書はそういった公衆衛生活動対策や法令、データ集計の変化を反映・収録し、年度版として発行されています。1983年に初版が刊行されて以来

近代の公衆衛生対策にかかる多くの事例やデータが毎年更新され、2022年には40版を経ています。

本書では、公衆衛生実務担当者が地域、職域、学域、母子保健等さまざまな領域で活動するために必要な事項や、公衆衛生活動全般にかかる必要資料が、22の分野ごとに数字や表としてまとめられ、わかりやすく作成されています。またそれぞれに必要な解説も分野ごとにサマリーでまとめるなど、読者が理解しやすくなるような工夫がなされています。まさしく公衆衛生に携わる医療従事者や事務担当者にとって必携の書であり、具体的な参考資料として活用できます。

予防医学活動は公衆衛生学、疫学、社会医学の多岐にわたる仕事として多くの人が関わっています。

旅する者や旅の案内人に「時刻表」があるように、公衆衛生実務に携わる多くの人の手元にぜひ置いていただきたい一冊です。

山根 則幸

やまね のりゆき

予防医学事業中央会専務理事。1974年より保健所、健診機関などで環境衛生や食品衛生、集団健診の実務に従事。2012年予防医学事業中央会に入り事務局長を経て現職。全国の支部で展開されている特定健診・特定保健指導、がん検診、学校保健検診等を科学的根拠に基づく方法で実施推進に努めている。本会評議員。